多様性とは　レポート

ID		氏名	
本文	本文で筆者は多様性とは「招かれざるお客さん」との関わり方が重要だと述べており、私も同様の意見を持つ。「招かれざるお客さん」と関わる上で、言葉の本質を理解することが最も大切だと私は考える。 「多様性」（ダイバーシティ）という言葉は1960年代にアメリカで生まれた。現代でも広く知られる1960年におけるキング牧師の人種差別撤廃を求める演説が良い例だ。その後1980年代に入り、世界中の多くの企業でマイノリティ側の視点を活かした商品開発が進められ「多様性」という言葉の概念が日本でも認識され始めた。それにより多くの日本の企業もマイノリティと呼ばれる人々を雇用し、少数者ならではの視点を活かした誰にでも使いやすい商品開発を行った。現代によく見られる例として、中性的なパッケージのものなどがある。 このように企業など大きい集団単位で考えると多数者と少数者の異なる視点を活かした、誰もが使いやすい取組を目指しており、アメリカで誕生した「多様性」が遂行できているように見える。だが、個人間の会話など小さな集団に目を向けると決して「多様性」な社会とは言えない。 「多様性」を害する最たる例が「人それぞれ」という言葉だ。最近、意見を発表する場や友人間の何気ない会話の中にこの言葉がよく登場する。たしかに、人それぞれ考え方があり個性があるため一概にこの言葉が間違いだとは言えない。害となる原因は現代における「人それぞれ」の捉え方、使われ方にある。 今までは、他者との意見が食い違ったとき意見をすり合わせお互いの折衷案を導き出す必要があった。そのため自身の意見と他者の意見の相違点がわかり深く理解することができた。しかし現代は「人それぞれ」と言えばそこで議論は終了する。これは一見多様性を持っているように思うが、実際は議論を面倒くさがり互いを知ろうとしていないだけなのだ。考えてみてほしい、クリスマスツリーを作るときにどの種類の木にするかで意見が割れたとする。ここで「人それぞれ」を使ってしまうと別の種類の木を用意する必要があり、対立した人々は絶対に同じ木を飾り付けることはない。だが、もしも議論を重ね同じ松の木を使うことにすれば、異なる意見だった人も同じ木に飾りつけができる。そこからは「人それぞれ」の時間だ。木をどのように飾り付けても良い。きっと個性あふれる賑やかなツリーになることだろう。すなわち、互いの意見をすり合わせ核となる部分を作ってはじめて正しく「人それぞれ」という言葉を使うことができるのだ。 今後この世界で生きていくうえで立場・業種に関わらず誰もが話の核を他者とすり合わせる必要がある。 よって私は、言葉の表面上の魅力に飛びついてしまうことなくどのように活用すれば最も有意義に使えるのかという本質を導き出すことが「多様性」を持つうえで最も重要だと考える。		
評価	A°	コメント	具体性があり、説得力のある小論文でした。構成も、本文の抑え直したうえで、社会に目を向けていたので良かったです。また、授業の内容や課題の本文を踏まえた記述となっていたため、goodでした。入試だったとしてもかなりの高得点を取れるような小論文に仕上がっていたと思います。「核」を決めてからそれぞれの自由を尊重する、という考え方がとても良かったです。組織であれば「理念」がそれに当たると思います。今回学んだことをぜひ今後の生活に役立ててください。		

多様性とは　レポート

ID		氏名	
本文	多様性とは、誰もが自由で豊かに暮らすための土台となるものだが、実現のためには覚悟が必要となってくる。本文のように、「招かれざるお客さん」と向き合わなければならない。 そもそも多様性とは、どんな条件をもった人でも皆等しく尊重される社会の実現のための考えである。しかし、今の社会では一部しか本来の意味で実現されていないと感じられる。 それは、多様性の存在理由に関連している。多様性という言葉がまだ世の中にあまり認知されていなかった社会には、「普通」という曖昧な基準があり、「普通」ではない人が差別されたり、尊重されない状況だった。それを是正するために生まれたのが多様性である。しかし、多様性の推進を掲げている活動の多くは、「普通ではない人に配慮をしてあげよう」という考えが根本にあるように感じられる。障害や価値観、性自認などの、一人一人の個性を多様性の一環として認めるのはいいが、それはその人が「普通」ではないから認めるという、実質的な差別をしているのではないだろうか。 この状況を断ち切るには、「普通」を形作ったそもそもの構造を見直す必要があると考える。この構造は、文化的差別、制度的差別と呼ばれるものである。簡単にいうと、文化や制度の中で時間をかけて形成された差別構造である。この構造がある限り、「普通」と「普通ではない」人との壁を作ってしまう。そして、これらの構造をなくすためには、一人一人が多様性の本来のあり方、差別構造を理解し、包括性を持つことが大事である。 これを実現する方法として、個人が一人ひとりでできることと、国が動かないと実践できないことの2つの方法がある。 まず、個人一人ひとりができることとして、自分が無意識に抱いている偏見や「普通」の概念などを見直して、意識して偏見を減らしていくことが大事である。自分の中にある無意識な偏見を見つけることはとても難しい。しかし、少しでも意識をしていれば、日頃の発言に少し違和感を感じることができたり、その違和感を見逃さないことでより本当の多様性へ近づいていくと思う。学校や職場では、それぞれの人が違う属性や価値観を持っている。そのような生活の場で、発言や偏見を見直すことが多様性につながると思う。 2つ目に、国が動かないとできないこととして、教育内容や広報が挙げられる。上記のことを実現するためには、まず文化的・制度的差別など、今の社会の問題について知らないと実践しようと思わない。まずは知ってもらうために、教育内容にこれらのことを組み込むことが重要である。また、国という大きな媒体が今の多様性の問題を大々的に取り上げる事によって、より多くの人々が上記のことを実行してくれるのではないだろうか。 これらを踏まえて、私も本来の多様性の実現のために、日々の生活や発言を見直し、無意識な偏見や差別を意識的になくしていきたい。		
評価	A°	コメント	具体性があり、説得力のある小論文でした。構成も、本文の抑え直し→自分が考える多様性を端的に述べたうえで、社会に目を向けていたので良かったです。また、授業の内容や課題の本文を踏まえた記述となっていたため、goodでした。価値観をテーマにした小論文では、綺麗ごとになりやすく、抽象的で当たり障りのない文章になる傾向があるのですが、具体的な事例が挙げられていたため、とても良かったです。入試だったとしてもかなりの高得点を取れるような小論文に仕上がっていました。制度や環境整備の面と、スタンスといった心や意識の面が多様性の実現に繋がると僕も思います。	

多様性とは　レポート

ID		氏名	
本文	多様性とは気の合う人だけと関わって生きることではなく、気の合わない人とも向き合い和解することであると筆者は述べている。 私も筆者の主張と同様に、多様性とは許容と和解だと考える。 気の合う人だけと関わりたい。自分を不快にする人は排除したい。そのような考え方は当然私にも存在し、それを改めなければならない多様性社会はとても過酷なものだと思う。しかし、自分の好きなものだけに囲まれた人間関係は、多少のコミュニティだけならまだしも全ての人間関係において取り入れてはいけない。取り入れてしまえばその人生は何の成長も革新も無い一極化したものになってしまう。SNSでの炎上や国家間の戦争がその結果だ。我々に必要とされる「多様性」とは、自分と異なる価値観の人を許容し、かつ自分も生きやすい環境にするために対話し和解することだと私は思う。 また、多様性が求められる対象は「社会」のような漠然としたものだけではない。家族間の関係にも多様性は求められている。 数ヶ月前、私はとある家庭問題で母と衝突した。価値観の違いによる対立と言えよう。私は母と考えが異なっているという事実が受け入れられず、傷つき憤慨して感情的な言葉を投げかけてしまった。その時点で私は母に傷つけられ、また同様に母を傷つけた。しかし母は自分が傷ついているのにも関わらず、不安に憂う私に寄り添った。程なくして私達は和解した。 このとき、母は私が思う多様性の全てを体現している。母は私の意見とそれを聞くことによって負った傷を全て許容し、かつ和解に向けて私との対話を続けたのだ。意見がぶつかったとき「人それぞれ」と突き放してしまえば、そこで対話は終わり何の解決にもならないまま人は一歩孤独に近づく。柔軟で頑丈な多様性社会の実現のために必要なことは、表面上の優しさだけではなく、失敗や衝突、それによって生じる傷をもしっかりと受け入れる姿勢なのではないだろうか。 許容と和解に溢れる社会を実現するために、社会全体はどのようにあるべきか。それはやはり、一人一人の寛容性と対話を重んじる態度だと考える。社会は個人の集合体だからだ。 SNSでの炎上は依然として残り続ける社会問題の一部だ。これらは人が新しい知識を吸収して考え方を更新しなかったり、自分の意見だけが正義だと言い張って聞く耳を持たなかったりすることで生じる。それらの要因を改善していかない限り、多様性社会は永遠に実現されず、人はどんどん孤独になる。いずれは我々が非生産的な口論の中心になる日が来るだろう。そうならないためにも我々は社会全体として他者に寛容的で、対話への労力を厭わない風潮を作っていかなければならない。 多様性社会の実現のため、私は個人として衝突を恐れずに人と関わることを重視していきたい。自分が生きやすい環境を作るため、価値観と経験を更新するため、私は対話を続ける。		
評価	A°	コメント	具体性があり、説得力のある小論文でした。構成も、本文の抑え直し→自分が考える多様性を端的に述べたうえで、社会に目を向けていたので良かったです。また、授業の内容や課題の本文を踏まえた記述となっていたため、goodでした。価値観をテーマにした小論文では、綺麗ごとになりやすく、抽象的で当たり障りのない文章になる傾向があるのですが、具体的な事例が挙げられていたため、とても良かったです。入試だったとしてもかなりの高得点を取れるような小論文に仕上がっていました。	

多様性とは　レポート

ID		氏名	
本文	私は、本文を踏まえ、多様性とは人と人とのぶつかり合いが生じて初めて生まれるものだと考える。筆者はこれを「招かれざるお客さんとどう出会い直すか」と表現している。では、具体的に多様性にはどのような要素が必要なのだろうか。 現代社会において、人々は他者との争いやぶつかり合いを避ける傾向にあると言われている。つまり、対立から目を逸らし、自分にとって都合の良い人間関係によって居心地の良い空間を作ろうとするのである。この「コスパ重視の人間関係」ともいえる考え方は人々が非合理なものを排除しようとして生まれてきた。例えば、議論による物事の決定が行われる時、9割の人間が自分と異なる意見を持っていたとする。自分は果たして自分の意見を伝えようとするだろうか。ほとんどの人が場の流れに流されてしまうのではないだろうか。自分の意見を伝えることで居心地が悪くなるからだ。こうして、自分と異なるものはそっとしておこうという考えに至る。こんな状況において、よく「人それぞれ」という言葉が用いられる。一見、多様性に対して肯定的な言葉だと思われがちだが、実はそうではない。この言葉こそが自分と違う相手との分かり合いを避け、マイノリティ側からは見えない都合の良い壁をマジョリティ側に対して作ってしまっているのである。この壁が存在する限り、マイノリティとマジョリティが混ざり合うことは無く、真の多様性が実現することはないのだ。 では真の多様性の実現に、社会はどうあるべきなのだろうか。私は人々の、議論に対する価値観の転換が大切だと考える。たしかに議論を行って話し合いによる結論を出すには、莫大な時間と体力を要する。現代に生きる私達にとっては「無駄」や「非合理」に思える作業なのかもしれない。それでも、世界に多様性の実現を求める人々がいるように、自分らしさを出せない社会があることは事実なのだ。自分の周りにもマイノリティとマジョリティを隔てる目に見えない壁がきっと存在するだろう。私達に必要なのは、壁の存在を理解し、それを乗り越えようとする姿勢ではないだろうか。壁の向こう側にある現状を知ることで、非合理的だった議論に対して新しい価値観を得ることができるはずだ。 真の多様性の実現に向け、私は人とのコミュニケーションを大切にしていきたい。ときにそのコミュニケーションが無駄で非合理なものだったとしても、自分にとっての学びは必ず得られるはずだ。世界には多様性の実現によって解決できる問題が数多くあり、今まさに自分が直面している問題もあるだろう。そんなとき自らが進んで行動し、コミュニケーションによって壁を乗り越えられるようなそんな人間になりたい。		
評価	A°	コメント	具体性があり、説得力のある小論文でした。構成も、本文の抑え直し→自分が考える多様性を端的に述べたうえで、社会に目を向けていたので良かったです。また、授業の内容や課題の本文を踏まえた記述となっていたため、goodでした。入試だったとしてもかなりの高得点を取れるような小論文に仕上がっていたと思います。一つアドバイスをすると、「議論」とはどのようなものを指すのでしょうか。「対話」「討論」「雑談」との違いはどのようなものでしょうか。国語は「言葉」の教科なので、言葉の意味や定義を抑えなおしてみると新たな発見があります。ぜひ考えてみてください。

多様性とは　レポート

ID		氏名	
本文	現在世界規模で推進されている多様性の輪の中、テレビやネットで多様性が語られる時代の中で、私たちマジョリティはマイノリティを受け入れることが求められている。国が口を揃えて、多様性を認めなさい、と主張してくるようになったが、はい、分かりましたの二言で少数派を認めることはできないと私は思う。そもそも国が定義する多様性とは何なのだろうか。 多様性―英語でいえばdiversityだが、英語辞典によると、”互いに非常に異なる多くの人やものの集まり”と定義されている。これを世間がわかりやすいように噛み砕いて推進されているのがSDGsである。17の目標の中に直接的に「多様性を認めよう」という文言はないが、各目標に繋げられているターゲットの中に、「遺伝的多様性」「生物多様性」などの具体的な言葉が述べられている。さらにSDGs自体の目的が「誰ひとり取り残さない世界の実現」であることから、多様性はSDGsの根幹をなす概念と言えるだろう。これを踏まえて私は多様性は自由な社会を目指す一つの目標であると考える。 では、多様性における自由とは何なのだろうか。性別や国籍、人種、障害の有無、性自認・性的指向などの個人の差をすべて許容することが自由につながるのだろうか。私はそうは思わない。無数にある多様性を0から100まで認め、互いに尊重し合いましょう、と言われても、素直に受け入れ許容できる人は少ないだろう。昔から根付いてきた男性主義の概念の存在や、異なる背景のものを認めたがらない性質も理由としてあるだろう。しかし私は、多様性を認めるうえで最も問題であると思うのは、多様性を盾にした言動や行動であると考える。「多様性とわがまま」は混同されがちだが、全くの別物である。私の考える自由は、個人個人色々な意見があっていい、ということである。しかし自由を求めるうえで伴ってくるのが責任である。価値観が違うのでわかりあえないと否定するのは無責任であり、価値観が違う人とどうわかり合えばいいのかを考えるのが、多様性における自由と責任ではないだろうか。多様性を振りかざし、勝手な言い分を権利だと言い張って自分のことを認めろと、相互理解を拒絶する人を容認することではない。このように社会で拡大解釈され、多様性という言葉だけが独り歩きしている現状をどう解決していけばよいのだろうか。 私たちは文化や教育の過程で無意識に特定の価値観を持っている。その存在を自覚し、自分自身の先入観を払拭することが大切なのではないだろうか。ネット社会では、情報を仕入れるのはSNSやテレビだろう。そこでメディアを通して、多様性の事例を広めること、誤情報を削除することが大切ではないだろうか。個人の意識を改革するためには、国が積極的に動いていかなければならないと私は思う。私自身も、他人の意見に耳を傾けるところから始めていかなければならないだろう。		
評価	A°	コメント	具体性があり、説得力のある小論文でした。授業の内容や課題の本文を踏まえた記述となっていたため、goodでした。入試だったとしてもかなりの高得点を取れるような小論文に仕上がっていたと思います。構成としては、まず課題文の抑え直しをしたうえで、「自分が考える多様性とは」という意見を端的に述べることからはじめるとより良くなります。一つアドバイスをすると、自分の主張と、今回の小論文の課題文である「覚悟」や「認めたくない自分」との関りを最後に抑えなおすことができるとより良くなります。	